

## ウルフに見られる孤独と融和

— *To the Lighthouse, Mrs Dalloway, Night and Day* をめぐって —

水 浪 純

### 〔抄 録〕

Virginia Woolf (1882-1941) は、人間の内面を描くことこそが小説家の使命であるとし、小説の新しい形を求め、それをなし遂げた。彼女が作品において追求しようとしたものは、現実の背後にある真実なるものであり、それはこの混沌とした人生の中で、一瞬の間に消え去っていく瞬間の中に存在するものであった。Virginia Woolf はそれをとらえ、ヴィジョンとして作品の中に再現し、読者に提示しようとした。孤独は処女作 *The Voyage Out* 以来常に彼女の小説のテーマであった。人間の孤独とそれと対極にあるであろう他者との融和、本稿では Virginia Woolf の三つの作品を通して、この人間の孤独と他者との融和を考察し、Virginia Woolf が追求し続けた人間の内面の真実の瞬間に迫ってみたいと思う。

キーワード：ヴァージニア・ウルフ、人生、瞬間、孤独、融和

### 1. 始めに

ヴァージニア・ウルフは“*Modern Fiction*” (1919) において、人生は意識の始めから終わりまで私たちをとりまく半透明な外被で、明るく、輝く光輪なのだと述べ、この変化し続ける未知で広大な精神を伝達するのが小説家のつとめではないだろうかと書いている<sup>(1)</sup>。この後ウルフは、*Jacob's Room*、*Mrs Dalloway*、*To the Lighthouse*、*The Waves* など、意識の流れの技法によって、人間の内面に迫る作品を発表し続けた。

人生を生きる上で、人は(とくに女性は)自分一人の精神的領域、すなわち孤独な状態を持つことは不可欠なことでウルフは考えた。孤独はウルフの作品全体のテーマでもあった。ウルフという孤独とは、人としてあるべき基本的な状態であり、そこで人は自分の内部に目を向けねばならないとする。ウルフは、*A Room of One's Own* の中で、女性が小説を書くためには自分のお金と自分の部屋を持たねばならないとしているが<sup>(2)</sup>、これは単に物理的なことを言っているのではなく、自分独自の精神的領域を持つ必要があることを示唆しているのである。A.M.リ

ンドバーグも、その著書 *Gift from the Sea* の中で、*A Room of One's Own* にふれ、女性は回転している車の軸が不動であるのと同様に、精神と肉体の活動のうちに、不動である魂の静寂を得なければならないと書いている<sup>(3)</sup>。それは、どうすれば活動している中で魂の静寂を得られるかということであった。

そうした孤独と対極にある他者との融和、人はこの二つの間にあってどう生きるべきなのか。この論文では主に、*To the Lighthouse*、*Mrs Dalloway*、*Night and Day* の三作品を通して、人間の孤独と融和を考察する。

## 2. *To the Lighthouse* におけるラムジー夫人の場合

ウルフは13歳の時母を失った。母の死の2ヶ月後、彼女は最初の精神発作を起こしている。それ程に母の死はウルフに大きな衝撃を与えたのだった。ウルフは“*Reminiscences*” (1907)<sup>(4)</sup>の中で、自分が日常的に死んだ母の姿を見ること、母がだれよりも身近な存在であると語り、また晩年に書いた“*A Sketch of the Past*”でも、母の声が聞こえ、姿が見えると書いている<sup>(5)</sup>。ウルフは母を *invisible presence* (見えざる存在) と呼んでいる。母は見えない存在としてウルフにとりついたのであった。彼女はそれまでの多分に理想化された母の姿ではなく、母の実際の姿と向き合う必要があった。*To the Lighthouse* (1927) において彼女はこの作業を行う。ウルフはあらためて両親、とくに母親と向き合い、その真の姿をとらえ描くことで母への *obsession* から解放されたのであった<sup>(6)</sup>。

ウルフの父は哲学者・批評家として名を成した人であったが、彼は先妻に先立たれ、子供一人を連れてウルフの母となる人と再婚した。この母もまた先夫と死に別れ、3人の子を連れて再婚する。この父と母との間に4人の子が産まれた。ウルフは末から2番目の子供であった。*To the Lighthouse* においては、ウルフの家庭そのままに、8人の子供を持つラムジー一家の夏の別荘での様子が描かれる。何人かの逗留客を含めた大家族を乏しい家計でやりくりするラムジー夫人は、ヴィクトリア時代のいわゆる家庭の天使としての役割を忠実に果たすタイプの主婦である。一方、若い頃に哲学界に華々しいデビューをした夫ラムジー氏は、今ではナイフのように痩せ衰えて、劣等感にさいなまれ、それを妻によって慰められるという、妻に依存しきった男となっている。ラムジー夫人は母性の持つ豊饒さで夫を支え、子供達を守り、客をもてなすのである。家計は決して楽ではなかったが、彼女は幸せな家庭を持ち、何一つ欠けるものはなかったはずである。しかし、ラムジー夫人は、時として深く悲しげな表情を見せる。ウルフの母は若くして最初の夫を亡くし、以後、死は常に彼女の身近に存在し続けた。何が起きてもまず第一に考えることは「死」のことであった。ウルフが *most positive of disbeliever* (最も徹底した不信の人)<sup>(7)</sup> と呼んだように、彼女の内実はメランコリックなものであった。母の持つ「死」の偏在感は、そのまま娘であるウルフに引き継がれ作品の中に取り込まれていった。ウル

フの作品のすべてが死の想念に満たされていると言っても過言ではない。ともあれウルフはラムジー夫人を単なる理想的主婦としてではなく、そうした実際の内面にまで立ち至って、出来得る限りその真の姿を描こうとしたのである。

逗留客の一人である画家のリリー・ブリスコウは、この作品に於いては「見る人」であり、「意識の流れ」の手法によって描かれるこの小説における重要な視点を担う人物である。彼女は、ラムジー夫人に憧れ、彼女の美しさ豊かさを称讃するが、一方では、その主婦的俗物性を軽蔑する。またリリーは、ラムジー氏の甘ったれた生き方に嫌悪を感じているが、またラムジー氏の持つ清々しく明確で理性的な厳正さに対しては心からの尊敬を持っている。リリー・ブリスコウの見たようにラムジー家には、こうしたラムジー氏の哲学者としての客観性を重んじる態度と、ラムジー夫人の直感に生きる主婦的感覚が、渾然一体となつて一つの秩序を与えているのだった。

ラムジー夫人は子供達を愛し、夫を愛し、彼らとの一体感を愛していた。夜、客達を含めた晚餐の席で、人々の融和する形の中から立ちのぼるものの中に永遠の時間を感じる人であった。彼女は自分に依存する夫をかばい、彼に生気を与えることを生き甲斐と感じていた。しかしながら、彼女の中には時にそうした夫を煩わしく思い、「夫の心が、振り上げられた手のように、自分の心に蔭を落としているのを感じた」<sup>(8)</sup>のだった。夜二階への階段を上りながら、ラムジー夫人は考える。

She felt rather inclined just for a moment to stand still after all that chatter, and pick out one particular thing; the thing that mattered; to detach it; separate it off, clean it off all the emotions and odds and ends of things, and so hold it before her, and bring it to the tribunal where, ranged about in conclave, sat the judges she had to set up decide these things. Is it good or bad, is it right or wrong? Where are we going to? and so on.<sup>(9)</sup>

家族達の世話に、また温室の修理費50ポンドに頭を悩ませる日々の中で、彼女は「ほんのしばらく」(for a moment)の自分一人の世界を渴望した。ほんのしばらくじっとして、ある一つの大切なことを、ほんとうに重要なことを取り出して、考えてみたいと切望したのであった。ウルフは母ジュリアが Oh, the torture of never being left alone! (一人にしてももらえないってなんて辛いだろう)<sup>(10)</sup>と言ったというこの言葉を、ラムジー夫人を描く上での大きなヒントとした<sup>(11)</sup>。子供達が床についた後、ラムジー夫人はやっと自分自身の世界を取りもどすのである。

For now she need not think about anybody. She could be herself, by herself. And that was what now she often felt the need of — to think; well not even to think. To be silent; to be alone. All the being and doing, expansive, glittering, vocal, evaporated; and one shrank, with

a sense of solemnity, to being oneself, a wedge-shaped core of darkness, something invisible to others.<sup>(12)</sup>

今はもうだれの心配をしなくてもいい、一人でいられるのだとラムジー夫人は思った。たとえ日々家族の中で生きようとも、一人となって、時に奥深く沈潜し、自分自身となって自分の世界に浸りきることは、ラムジー夫人にとっては人間として生きる上で、必要不可欠なことであつたのだ。すべての自分の存在と行動とは外に拡がり、きらきらときらめくものは蒸発してしまい、厳かな感じで身体は収縮し、だれにも見えない暗い楔形の芯 (a wedge-shaped core of darkness) となって自分の世界へと下っていくのだった。彼女は「この暗い楔形の芯はどこに行くことも出来るのです」と言い、自分自身の自由さを確認する。それさえあれば、彼女は再び自分の日常の中に立ち戻り、そこで生きていくことが出来るのであつた。彼女はまた、人は、ある意味では単純なその外観によって判断されるが、その外観の下にあるものは、人間の精神であり、そこには混沌と深淵が存在すること、そこは暗く四方に拡がり、底知れず深いものであることを知っていた。人間とはとらえどころもなく、どこまでも深く広がり、存在し続けるもの、もし一人になる時間が与えられるならば、自分は「暗い楔形」となって、自由に自分の世界に生きることが出来るのだとラムジー夫人は考えたのだった。

こうした「自分の思いの中に沈潜していく」ことについて、ウルフは日記に次のように書いている。...; slipping tranquilly off into the deep water of my own thoughts navigating the underworld;...<sup>(13)</sup> ウルフにとっての孤独 solitude とは、あくまで肯定的な意味であり、自分の独自性、独創性を高めるための貴重な状態であつた。L.Gordon は、Virginia Woolf drew a distinction a solitude that is potentially creative and a debilitating state of withdrawal following impulses of aversion.<sup>(14)</sup> と述べ、このウルフの意図した solitude を説明している。それは創造的になりうる孤独であり、後者の、強い嫌悪感から、自分の中に閉じこもって何も出来なくなる状態になることをウルフは区別した、と Gordon は説明している。この前者の孤独をラムジー夫人もまた求めたのであつた。ところで、この slipping into the deep water というイメージはウルフが好んで使ったイメージであり、実はウルフの他の作品にも現れてくる。*The Waves* においては主たる登場人物バーナードの持つイメージとして登場する。これは一種の恍惚状態をも表し、死のイメージとも重なってくる。ウルフがウーズ川で入水自殺を遂げたことを思うと不思議な感に襲われるが、ウルフが常に死の想念にとりつかれていたことを思い合わせると納得出来る。彼女の中には死への恐怖と死への強い憧れが同居していたのだった。*The Waves* のバーナードもまたウルフ同様に「死」に対してアンビヴァレントな思いを持っていた。彼は孤独を憎み、人との一体感、人との融和を何よりも求める人間であつたが、その人生のわりにおいて「死」と対峙したとき、はじめて孤独の価値を知るのである<sup>(15)</sup>。

先程の L.Gordon の説明の中にある後者の孤独、すなわち前者の創造性を育てる孤独に対し

て、否定的な意味を持つ孤独 isolation、これもまたウルフにとっては言語に絶するほどに大きな問題であったと言わねばならない。作品 *Mrs Dalloway* におけるセプティマス、*The Waves* におけるローダ、二人とも自殺によって人生を終えるのだが、彼らは精神の孤立に苦しみ続けた。この二人を通して、ウルフは外界との断絶というウルフ自身が知っていた最も恐ろしい体験を描いたのであった<sup>(16)</sup>。人は一人では生きて行けず、他者との関わりの中で生きて行くわけであり、作品の登場人物達が、他者との調和を保ちつつ、孤独の中で自分自身を保ちつづける姿は印象的である。

ラムジー夫人の、家族と家族を越えた他者への献身の日々はそう長くは続かなかった。ラムジー夫人のモデルである自身の母を、ウルフは“Reminiscences”の中で、「疲れた泳ぎ手のようにだんだんと深く沈んだ」<sup>(17)</sup>と書いている。ウルフの母は49歳でその生涯を閉じたのであった。

### 3. *Mrs Dalloway* におけるダロウェイ夫人の場合

*Mrs Dalloway* は、1925年出版されたウルフの第4番目の長編である。これは1923年6月のある天気の良い一日の出来事の中に、クラリッサ・ダロウェイとセプティマス・ウォレン・スミスの心理を描いた作品である。クラリッサは保守党の国会議員リチャード・ダロウェイの妻であり、上流階級に属する51歳の女性である。一方セプティマスは第一次大戦の戦友の死のショックのため、幻覚と強迫観念に苦しみ自殺する三十歳前後の青年である。小説ではこの二人はダブルとして描かれ、従ってこの二つのプロットは交差していくわけであるが、今回の論文では、クラリッサと夫リチャード・ダロウェイとの関係にのみ、スポットを当ててみたい。

クラリッサはリチャードと結婚する前に、ピーター・ウォルシュという恋人がいた。ピーターはクラリッサがリチャードを選んだことで失恋し、インドで何年かを過ごしていたが、そのピーターが思いがけなくクラリッサを訪ねてくる。クラリッサは、素朴で堅実、そして頼りがいのあったリチャード・ダロウェイを夫に選び、今は国会議員の妻として、社交界でも活躍している。多くのものを手に入れたこの結婚は成功であったにちがいない。一方ピーター・ウォルシュはインドから帰ってきたが、今は携わるべき職もないという有様である。しかし彼は若い頃には社会主義にのめり込んで、オックスフォードを放校になったりと、知識欲旺盛な情熱的な男であった。クラリッサは決して自分の結婚を後悔しているわけではないのだろうが、何か彼女の中に、間違った選択をしたのではなかったかという何がしかの思いがひそんでいるようにも思えるのである。ピーターを棄てリチャードを選んだあの過去の場面が何度となく彼女の頭に蘇ってくる。クラリッサは夫リチャードを愛していたし、またリチャードも妻を愛し、その健康を気遣う、申し分のない夫であった。しかしリチャードは、政治という世界に生きる実務家として、いわば厳密にいうならば、彼はクラリッサとは別種の人間であった。クラリッサはリチャードのことを「彼の称讃すべき神々しい単純さ」などと評するが、鋭い感受性を持

って生きるクラリッサにとって、夫リチャードは一体どんな存在であったのか。クラリッサの心の奥には、常に死に対する恐怖がひそんでいた。それは老齢による無感動への恐怖とも置き換えてもよいものであったが、そうした彼女の耐え難いほどの恐怖を一体夫は気づいていたのだろうか。

クラリッサは大病をした後、リチャードとは寝室を別にしている。「議会の審議が遅くまで続くので、リチャードは病後の彼女の眠りを妨害することがあってはならないと主張し、寝室を別にするようになったから。」<sup>(18)</sup>というのがその理由であるが、屋根裏部屋の狭いベッドが彼女の休む場所となる。夫との間には多少疎遠になってはいるが、彼女はあえてその関係にとどまろうとする。それは「魂の独立」を保持したいと願ったからである。結婚における「魂の独立」、そのことについてクラリッサは次のように言う。

And there is a dignity in people; a solitude; even between husband and wife a gulf; and that one respect, thought Clarissa, watching him open the door; for one would not part with it oneself, or take it, against his will, from one's husband, without losing one's independence, one's self-respect — something, after all, priceless.<sup>(19)</sup>

人には尊厳があり、孤独がある。夫にも妻にも「孤独」という領域があり、それはお互いの「魂の独立」のために必要なものなのだとクラリッサは考えるのだった。しかし、クラリッサはそもそも自分が個の存在であることを求める女性である。彼女はリチャードなら彼女自身の内面に踏み込んで来ることはないとして、彼を結婚相手として選んだとも考えられる。その意味では、彼女の結婚は成功であったのかもしれない。クラリッサは孤独といった領域を保持することが出来た。それは一人の人間として持つべき貴重なものであったのだ。彼女には「魂の独立」としての孤独のほかに、孤独に伴う「寂しさ」といった蔭がほの見える。クラリッサとリチャードの融和には何か永遠に満たされぬ部分があるように思えてならない。

人は本当の意味で、他者との間にある深淵を越えていけるのだろうか。そうした他者との生活の中で、自分自身でいるということにはどれほどの困難さが伴うのだろう。ラムジー夫人の「暗い楔形の芯」とも考えあわせると興味深いものがある。しかし、ラムジー夫妻の結婚生活には、なにがしかの不調和はあったにせよ、夫婦の間は強いきずなで結ばれていた。第1部の終わり、妻はその美しい微笑で夫に愛を伝え、ラムジー氏はその愛で満たされる。夫に寄り添いながら、これ以上の幸福はないとラムジー夫人は感じるのである。こうした夫と妻の融和の瞬間は、*Mrs Dalloway* においては見出すことが出来なかった。

#### 4. *Night and Day* におけるキャサリン・ヒルベリーの場合

ここまで、まずウルフの作品における二組の夫と妻の関係を見てきた。ウルフはこれら意識の流れの手法による作品を書く前に、伝統的な手法による作品 *The Voyage Out* (1915) *Night and Day* (1919) を書いているが、これらの作品は共に人間の孤独がその主題であるように思われる。とくに長編第二作目の *Night and Day* では、「私生活」と「社会生活」との分離と調和がテーマである。つまり、自己の内面を見つめる「孤独」と他者との「融和」の問題であり、作品のタイトルである「夜」は前者を、「昼」は後者を表しているのである。

主人公キャサリン・ヒルベリーは、由緒ある家柄に育つ娘であり、客間で母に代わって手際よく客達にお茶をふるまうが、実はそのことには精神の5分の1しか使っていない。彼女はひそかに数学や天文学に興味を持ち、また一人きりの夢想の世界に遊ぶ人間である。婚約者ウィリアム・ロドニーは文学愛好家の優しい心遣いのできる青年だが、キャサリンは彼を愛してはならず、結婚は彼女が夢の世界、すなわち一人の世界に生きるための手段と割り切っている気配がある。結局、この婚約は解消され、キャサリンは共に夢をはぐくむことの出来る青年レイフ・デナムと結ばれる。レイフ・デナムもまた同種の人間であり、彼らの間には魂の親交が生じたのも当然だった。

この小説は伝統的形式に則ったものであるが、ウルフは人間の心に密着し、その内面世界を克明に描き出す。小説の題名は先に述べたように、私生活と社会生活の対比を指しているが、同時に夢想と現実、思想と行動、孤独と社会を指しているようだ。キャサリンは次のように考える。

Why, she reflected, should there be this perpetual disparity between the thought and action, between the life of solitude and the life of society, this astonishing precipice on one side of which the soul was active and broad daylight, on the other side of which it was contemplative and dark as night? Was it not possible to step from one to the other, erect, and without essential change?<sup>(20)</sup>

なぜ思考と行動との間、孤独生活と社会生活の間には、永遠の不一致があるのだろうか。一方では魂が真昼のさなかに活動し、他方では魂が夜の暗闇の中で瞑想に耽っている、この恐ろしい断絶がなぜあるのだろうか。身を屈することもなく本質的な変化もなしに、一方から他方へ飛び移ることは不可能なのだろうか、と彼女は考えるのである。「自由」を求めつつ、また同時に「愛」を求めようとするキャサリンは、人間の持つ矛盾に目を向けるのだった。一見 happy ending に思えるこの小説も、多くの問題を持っている。彼らは確かに同種族ではあるが、それぞれの夢想の世界は同種のものではなく、数学好きのキャサリンは、数学的自然科学的真理に

生きるであろうし、相手のレイフ・デナムの持つ世界は幻想の世界である。二人は夢を共有する瞬間を求める。

They brought themselves by these means, acting on a mood of profound happiness, to a state of clear-sightedness where the lifting of a finger had effect, and one word spoke more than a sentence. They lapsed gently into silence, travelling the dark paths of thought side by side towards something discerned in the distance which gradually possessed them both. <sup>(21)</sup>

彼らはやがて深い幸福感に動かされ、指を上げただけで意味が分かり、一つの言葉が一つの文以上の意味を語る、そういう澄んだ状態にまで到達して行ったのであった。二人は並んで、遙か遠くにあって二人をとらえる何ものかに向かって歩いていく。彼らの夢は叶えられようとしていた。

## 5. おわりに

ウルフの作品における3人の女性の場合を見てきた。一人は人生のほとんどの時間を家族に捧げ、ほんのひとときの孤独の時間を渴望したラムジー夫人。二人目は夫との何不自由のない生活の中で、魂の独立のために一人の時間を求めたダロウェイ夫人、そして三人目は共に夢想の世界を持つ男性を結婚の相手として選んだキャサリン・ヒルベリーである。

人間というものは、本質的に孤独な存在であり、人と人との間は「深淵」によって隔てられている、というのが処女作 *The Voyage Out* 以来、ウルフ作品の底を流れる思想であった。

「人と人との結びつきとは何なのか」「自分の心の独立と自由を保ちつつ、人は人を愛することが出来るのか」それはウルフ自身のテーマでもあった。しかし、ウルフはこうした問いに明確な答えを示してくれてはいない。彼女の作品の一つ一つは、この問題への新たな「問い直し」であったのかもしれない。キャサリンはこの小説の半ばにおいて次のように言う。

It's life that matters, nothing but life—the process of discovering — the everlasting and perpetual process, not the discovery itself at all. <sup>(22)</sup>

問題は生き方にあるのだ。絶え間なく永遠に続くその発見の過程にあるのだ。発見自体にあるのではないのだ。実は、これはキャサリンが道を歩きながら夢中になってつぶやく言葉であり、このとき、将来結ばれることになるレイフ・デナムとすれ違うのだが、キャサリンはそれにも気づかないほどに、自分の思いの中にいる。またこの言葉はキャサリンによってもう一度、それ程間をおかずに語られる。ウルフはこの言葉に重要な意味を含ませているようだ。こ



の言葉には発見の過程こそが人生であり、目標は問題ではないのだし、愛も恋も結婚も、すべては結局、人生を探究するプロセスであるのだという意味が込められているようだ。

この *Night and Day* の最後に近く、キャサリンは一つの答えを見出す。

It seemed to her that the immense riddle was answered; the problem had been solved; she held in her hand for one brief moment the globe which we spend our lives in trying to shape, round, whole, and entire from the confusion of chaos. <sup>(23)</sup>

彼女には、大きな謎の答えがいま出たところのように思えた。彼女は、人が一生を費やして混沌とした状態から形を作り、完全で無欠にしようとする球を、束の間だけ、自分の手にしたのだった。その球を手に行っているのはほんのわずかの間であり、それは一瞬の間に壊れていくものだったのだが、二人は充実した瞬間を持つことが出来たのだった。

この globe という概念はウルフが好んで用いたもので、これを持つ瞬間には、人生は自足した、秩序だったものとして現れる。こういう時を除いて人生は混乱であり、人と人とは深淵によって隔てられた「氷山のような孤独な存在」で、互いにはほとんどコミュニケーション出来ないものである、というのが *Night and Day* の前作であるウルフの処女作 *The Voyage Out* に見られるウルフの人生観の根底にある考えであった <sup>(24)</sup>。

ウルフは移ろいやすいこのカオスたる人生の中で、一瞬の間に消え失せる瞬間をとらえ、それこそがこの人生の混沌の中で、深淵によって隔てられた人と人をつなぐものなのだ、として作品の中に提示した。ウルフが追求した孤独と融和、個と社会、思想と行動の関係は、結論を見出すことは困難なのかもしれない。前述のA.M.リンドバークは次のように言う。

The solution for me, surely, is neither in total renunciation of the world, nor in total acceptance of it. I must find a balance somewhere, or an alternating rhythm between these two extremes; a swinging of the pendulum between solitude and communion, between retreat and return. <sup>(25)</sup>

ウルフも示唆しているように、人はそれぞれの人生の中で、この両者の間を揺れ動きつつ、充足した完全無欠な瞬間を手に入れることが出来るのであろう。心は無数の、些細な、狂気じみた、儚い、あるいは、鋼のような鋭さをもって刻みつけられた印象を受け取るものであり、その心に落ちかかる原子をその落ちかかる順序通りに記録し、たとえ外見はいかに支離滅裂であろうと、それぞれの光景あるいは事件が意識に刻みつける模様を辿ることが小説家の任務であるとウルフは言うのである <sup>(26)</sup>。その一見難解な作品に触れることで、読者はその粗雑な日常の中に紛れ込んでいく自分自身を押しとどめ、魂の静寂たる孤独の中に、自己の魂に糧を与える方法を探ることが出来るのである。

〔注〕

- (1) V.Woolf, *The Common Reader*, First Series (ed.by Andrew McNeillie, A Harvest Book・Harcourt, Inc. New York, 1984) p.150. Originally published: 1925.
- (2) V.Woolf, *A Room of One's Own* (Bloomsbury Classics, London,1993) p.2. First published in Great Britain: 1928.
- (3) A.M.Lindbergh, *Gift from the Sea* (Kinseido Ltd. Tokyo, 1958) p.15.
- (4) V.Woolf, *Moments of Being* (Grafton Books, London, 1989) p.46. First Edition published in Great Britain: 1976.
- (5) Ibid, p.p.89-90.
- (6) Ibid, p.90.
- (7) L.Gordon, *Virginia Woolf: A Writer's Life* (Oxford Paperbacks, 1988) p.35.
- (8) V.Woolf, *To the Lighthouse* (The Shakespeare Head Press Edition, 1992) The Window XIX
- (9) Ibid, The Window XVIII
- (10) V.Woolf, *Moments of Being* (Grafton Books, London, 1989) p.101.
- (11) L.Gordon, *Virginia Woolf: A Writer's Life* (Oxford Paperbacks, 1988) p.33.
- (12) V.Woolf, *To the Lighthouse* (The Shakespeare Head Press Edition,1992) The Window XI
- (13) V.Woolf, *A Writer's Diary* (The Hogarth Press London 1954) p.80. 27th June 1925
- (14) L.Gordon, *Virginia Woolf: A Writer's Life* (Oxford Paperbacks, 1988) p.61.
- (15) V.Woolf, *The Waves* (The Shakespeare Head Press Edition, 1993) p.190.
- (16) L.Gordon, *Virginia Woolf: A Writer's Life* (Oxford Paperbacks, 1988) p.56.
- (17) V.Woolf, *Moments of Being* (Grafton Books, London, 1989) p.46.
- (18) V.Woolf, *Mrs Dalloway* (The Shakespeare Head Press Edition, 1996) p. 25.
- (19) Ibid. p. 90.
- (20) V.Woolf, *Night and Day* (The Shakespeare Head Press Edition, 1994) pp.277-8.
- (21) Ibid. p.414.
- (22) Ibid. p.103.
- (23) Ibid. p.412.
- (24) 神谷美恵子『ヴァージニア・ウルフ研究』(みすず書房1981) p.100.
- (25) A.M.Lindbergh, *Gift from the Sea* (Kinseido LTD 1958) p.15.
- (26) V.Woolf, *The Common Reader*, First Series (ed. by Andrew McNeillie, A Harvest Book・Harcourt, Inc. New York, 1984) p.150. Originally published: 1925.

(みずなみ まこと 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：前川 哲郎 教授)

2003年10月15日受理